

981116 (DR-SYAJI)

謝 辞

本論文の関連研究に着手してほぼ 10 年の月日が流れた。振り返ってみれば、この間に多くの方々の励ましとご指導を頂いたことか。この方々の存在なくして本論文は完成することはなかった。

まず、スポーツの映像に関心を持ったのは、1989 年に文化人類学者である山口昌男先生が筑波大学のスポーツ社会学の兼任教授となられて、大学院生対象のスポーツ映画論の授業に特別参加させていただいた時からである。その時は既に東京都立大学に在職していたが、山口昌男先生や大学院生たちの刺激的なゼミに触発されるとともに、それまでにスポーツの記号論や解釈学に興味を抱いて方法論的な勉強をしていた関係上、解釈の対象としてのスポーツ映像に大きな関心を抱いたのである。その時以来、筑波大学スポーツ社会学研究室には研究面の「他者」を暖かく受け入れていただくとともに、ひとかどならぬご指導を頂いてきた。

本論文の指導教授である筑波大学体育哲学研究室の片岡暁夫教授には、1991 年に奈良教育大学で開催された日本スポーツ教育学会大会の折りに、本博士論文作成にあたっての動機づけや心構えを懇切丁寧にご指導いただいた。それ以来、毎年欠かさずに論文完成に向けて適切にご指導を頂くとともに、遅々として進まぬ仕事ぶりを最後まで温かく見守って頂いた。この間、幸運にも東京都の在外研究員としてカナダの The University of Western Ontario に客員研究員として 8 ヶ月赴任し、研究交流および資料収集の機会に恵まれた。Kinesiology 学部の Klaus Meier, Robert Barney の両教授、Ray Takahashi 講師、映画学科の David Burr 教授、Gordon MacDonald, Douglas Brown, Scott Martyn らの大学院生たちには本当にお世話になった。日本では入手できない様々なスポーツ映像関連の資料を収集できたこと、北米において日本映画論を聴講する機会に恵まれたこと、映画研究の基礎を学べたことは本当に本論文の基礎を支えるものとなったと思っている。

さらに、多忙にも拘わらず、本論文を専門的な立場から副査として再度にわたって精読いただき、適切な助言と励ましを頂いたのが、筑波大学体育科学系の高橋健夫教授、佐伯聰夫教授、および清水 論講師の先生方である。この先生方の温かいご指導と厳しいなが

らも的確なご指導によって本論文はようやく完成に至ることができた。また、筑波大学に在職していた頃から絶えることなく芸術的関心や余暇論的バックグラウンドを鍛えて頂いたのが松田義幸教授である。ともすれば微視的視座に偏向しがちなスポーツ学的素養を幅広い視座からスポーツ文化を見るように導いていただいた。さらに、東京教育大学大学院（幡ヶ谷）のスポーツ哲学および体育原論の先輩たちや同窓の仲間たちからは「ソーマ研究会」において飽くことのない助言や支援を頂いた。特に、遠藤卓郎（図書館情報大学）、加藤泰樹（上越教育大学）、杉山 進（お茶の水女子大学）、滝沢文雄（千葉大学）、森知高（福島大学）の各氏には、研究会だけでなく公私ともに折に触れ支えとなっていた。また、筑波大学の体育哲学研究室の佐藤臣彦、近藤良享の両助教授、石垣健二技官には研究面の助言のみならず懸命なサポートを頂いた。東京都立大学大学院理学研究科体育学教室の構成員の方々には、本論文を書き上げるにあたって仕事面での配慮も頂いている。大学院に進学するとき以来、薫陶を仰いだ松本憲尚先生をはじめとする広島大学の関係者の方々や先輩・友人からも有形無形の指導や助言を得ている。

これらの多くの方々が存在によって初めて一つの研究が形をなし、次の研究へと飛翔する足がかりができたのだと思う。ここに記して、これらの方々に心より深く感謝申し上げる次第である。そして、論文完成まで温かく見守ってくれた両親、妻由美、息子たち洪介と深、家族全員に感謝したい。

1998年 1月

東京都立大学大学院理学研究科

舛 本 直 文